

第54回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

2020年は、コロナ禍により私たちの日常生活はもとより、文化活動や「運動」そのものについても変容を強いられてきた1年であった。

現在も、国内のコロナ感染拡大の収束が見えない中で、全国では活動休止を余儀なくされているサークル・合唱団がある一方、感染防止対策を講じながら練習や公演再開にこぎつけている団体等も少なくない。

本年は、地域によって感染状況、集まれる会場条件等、リスクの違いがある中で方針を実践していく困難さも全国で様々であることから、地域の実情を鑑み、各サークル・合唱団が、「でき得るところから実行する」判断を尊重しあう方針提起としたい。困難な中、感染防止対策を講じながら、うたごえの灯をともし続けていくことが、人々に生きる勇気とエネルギーを沸き起こし、希望への一閃の光を投じるのである。

本来なら「被爆75年日本のうたごえ祭典inひろしま」（以下、ひろしま祭典）開幕の日であった11月21日、コロナ禍の困難な中、地元広島西区民文化センターにおいて「♪みんな元気か がんばろうフェスタ2020」が開催された。

フィナーレの全国合同ではライブ&リモートにより地元と全国の仲間550人が心ひとつに歌い交わし、全国からの多くの視聴者と共に、本年12月に延期になった祭典成功への大きな足掛かりをつくった。

コロナウイルス感染拡大に見舞われた昨年は、日本のうたごえ全国協

議会（以下、全国協）主催の合唱、郷土芸能、創作等の全国講習会全てが中止（延期）、広島で開催予定だった合唱発表会も中止、4月のNPT（核不拡散条約）再検討会議&世界大会inニューヨークの国際共同行動に全国のうたごえから100人を超える派遣を予定していたが中止やむなきに至った。そのような中、うたごえは原水爆禁止世界大会でのオンライン「ねがい」全国合同を成功させ、広島・長崎の被爆者や世界の多くの国々と市民運動が共同して取り組んできたヒバクシャ国際署名など核兵器禁止条約発効実現のための光を灯す運動にうたや音楽を通して連帯してきた。

全国協は2017年の全国総会において、2018年70周年記念事業委員会の設置ならびに10の記念事業計画と、さらに5年後の2023年運動75周年を展望する将来の運動のあるべき方向を示す「うたごえ2023ビジョン」活動計画を策定した。

その計画は、「演奏・創造・普及・創作活動の旺盛な展開」「組織建設・普及活動の強化」「専門家・他団体との協力共同・連帯の強化」「合唱発表会運動の活発化」「日本のうたごえ祭典」「うたごえ新聞読者拡大」「出版事業の旺盛な展開」「教育・学習活動の強化」「郷土のうたと踊り活動の強化」「国際交流の発展」の10のビジョンを柱に、団体数、団体会員構成員数、うたごえ新聞の読者数、季刊「日本のうたごえ」読者数などビジョン実現の「幹」となる組織建設の拡大目標を明確にした内容になっている。

今総会は、75周年記念事業委員会の設置をはじめ、今後21年〜23年に運動が進むべき道をプランニングしていくために、運動がもつ夢と展望、課題と役割などの意見や経験を交流し合い、みんなのものにしていく目的をもって開かれる。コロナ禍でもうたごえを発展・成長させるために。新しい扉を開き、次のステージへ共に歩もう。

2020年度 活動のまとめ

①うたごえを創り広げる活動

●「安倍9条改憲阻止」、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、「安倍暴走政権に止め」のうたごえ

ヒバクシャ国際署名は、各地でNPT代表団が先頭に立ち取り組まれた。5年にわたった取り組みで36都道府県53268筆を集め、実筆12251筆を国連に送った。長崎では、この1年も取り組みが進み、18211筆を集めた。2つの改憲発議反対署名は「3千万署名」と合わせてうたごえとして28199筆を集めた。

NPT再検討会議が中止となったため、原水爆禁止世界大会 in ニューヨーク行動への代表派遣は実現しなかったが、これに向けたうたごえ新聞意見広告「人間の虹」は、271団体4792個人からのべ7506口が寄せられた。

オンライン開催となった原水爆禁止世界大会には、文化企画として「ねがい」の全国合同演奏をオンラインで実現。集えない中でも平和のうたごえを響かせることができた。

北海道では、核のゴミの最終処分場の調査受け入れを表明した自治体に対し、道協議会として抗議文を送付。現地に足を運んでの活動も取り組まれた大阪のちばりよく沖縄合唱団は作曲を持って秋に沖縄連帯ツアー。

「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」は、今後の方向性を検討中。

●「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、歌う喜びを広げる活動

各地のうたごえ会も、マスク、パーテーション、ディスプレイなど工夫をして開催された。愛知のうたごえ「ネットであうたごえ喫茶」、京都の「忠やんとうたごえ」、長野の「どぞむしライブ」など、いち早くYouTubeでうたごえ喫茶配信を行い、コロナ禍で歌えない人たちの好評を

得た。

平和行進、19行動など、街頭でのうたごえも、マスクをつけるなどの工夫をしながら各地で行われ、参加者を激励した。

大阪では、二度目の都構想の住民投票に創作曲で訴え、勝利した。秋田では、創作曲「イージス・アショアはいらない」で配備撤回の運動を励まし、勝利の力となった。

秋の憲法集会は、集会が持たれた所もあり、京都は円山音楽堂で開幕演奏。東京も国会行動参加者をうたごえで激励など行った。足を運んでうたを届けられない中、佐久総合病院コーラス部は、七夕の病棟訪問演奏会をビデオレターで、などの工夫も見られた。

●多くの人が「こぞうたごえを創りだす」愛唱歌を創りだす

この1年の創作活動は、2月の全国創作講習会（奈良）で幕を開けた。奈良在住の作家・寮美千子さんの講演・実作・発表会と、実り多い講習会となった。奈良18名、全国合わせて47名。持ち寄り詞曲51、最後の発表会で5曲が演奏された。

8月に計画した全国創作講習会（福島）が中止・延期される中で、新たな取り組みも始まった。

福井では、福井センター合唱団が「チェーンポエム」というネーミングで33曲もの歌を創作し、歌集、CD、創作曲発表コンサートまで盛り上がり、武生センター合唱団にも波及、十数曲が生まれた。

愛知では、「創作連続講座・作曲編」を開催した他、コロナ禍下、YouTube利用のオンライン型創作発表会を実施、19曲のエントリーがあった。初めての試みだったが、全国どこからでも何回でも発表作品を見ることができ、リモートで生の講評も聴けるなど、今までになかった成果があり、今後の取り組み方への可能性を示した。

埼玉では11月に初めてのオリジナルコンサートを開催、22曲が発表された。

大阪では、都構想反対運動の中で「守ろう！大阪市」を創り、歌を流して宣伝、食い止める力となるなど、現実の課題に切り込む活動を展開

した。

また、昨年設立した全国創作センターの呼びかけで、7月までの1年間に寄せられた91曲から、4人の選考委員による推薦曲5曲、ノミネート9曲が発表された。新しい書き手も増え、引き続き、創作センターへの登録の呼びかけもしている。

核兵器禁止条約が発効し、福島原発事故10年を迎え、ますます厳しさを増す辺野古のたたかいの中で、うたごえの創作運動への期待も高まっている。

②合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

● 県、産別、全国の合唱発表会の取り組み

ほとんど中止となった各県、ブロック、産別、階層の合唱発表会。

その中で、12月、佐賀で7団体を集めての合唱交流会が行われた。京都では、合唱発表会に代わるものとして府民音楽会うたごえ会を11月に野外で開催。

全国の合唱発表会について、小委員会などで中長期的な課題の検討をすすめ、引き続き常任委員会でも検討していくこととした。

● 地方祭典、産別祭典など

大阪が2月末ぎりぎりに、70周年祭典を開催。千名の観客に勇気を与えた。11月には愛媛のうたごえ祭典が文化芸術活動再開支援助成金を獲得して開催。

県、ブロック、産別の祭典は、いずれも中止、延期となり、2021年開催をめざしている。

● 「被爆75年2020年日本のうたごえ祭典 in ひろしま（ひろしま祭典）」の取り組み

4月に、1年間の延期を決め、祭典グッズの普及を全国にも呼びかけ

た。1年前企画として、2021年への再スタートとなった♪みんな元気か がんばろうフェスタ」は、全国と初のリモートで結んだ音楽会として地元広島でも評価され、運動の灯を消さない取り組みとして、全国連帯で成功させた。これにあわせて全国の賛同募金活動も再開した。

● 2021年以後の日本のうたごえ祭典の取り組み

2021年に延期されたひろしま祭典の開催準備は、コロナ感染状況を睨みながら進んでいる。

2022年については、全国交流会とする方向をもち、会場選定に入っている。2023年以後、祭典プロジェクトで開催候補地をあげて、要請と調整にあたってきている。2024年佐賀、2025年兵庫が具体的な検討に入った。

③うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

「うたごえ発ジャーナル」としてうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる

● 「読み・作り・広げる」を合い言葉に、紙面から運動の財産を学び、創造、組織、普及の力にする

活動方針（5つの止）、特に被爆75年、核兵器廃絶への活動、日本のうたごえ祭典 in ひろしま成功を軸に編集方針を持った。しかし、コロナ禍で3月以降、合唱活動自粛、イベント中止で通信や情報が届かない事態となる。その中で、この状況をどう超えるか、合唱・文化・芸術活動とは、を運動内外各分野から寄稿を募り特集。「3密」はライブの醍醐味（松元ヒロ・コメディアン）、「合唱受難の今、可能性を探る」（本山秀毅・合唱指揮者）、「コロナ禍の中、音楽と向きあう」（栗山文昭・合唱指揮者）他。合唱と飛沫感染対策のアドバイス（医師・岩倉政城）。また、「私の見た香港の闘い」（川口真由美）、「文化が民主主義を育む土

壤」(志田陽子・法学者)などコロナ禍で問い直される人権、憲法、沖縄、原発、地球環境問題からも特集。

取材も困難な中、各地の工夫ある取り組みを伝え、全国の仲間を励まし続けた。

自粛の中、聴衆を前に「歌う喜びかみしめた」と語る声楽家・平野雅世さんは、指導合唱団のリクエストに応え、各パート音源を作成し届けた等、リモートやZoomの取り組みも紙面で交流した。

自粛で集まれない中、投句で想いをつなごうと詩人・石黒真知子さん提案企画「連歌しよう 3つのつーつながる・つたえる・つづける」は33人の句をつなぎ、曲が生まれた。

●通信活動

コロナ第2波を越えた7月頃から対策を講じ徐々に合唱活動再開の中、通信も活発になる。2020年通信総数1228通(ニュース含)。昨年1098)。自粛期間があっても前年比増は、コロナを超えるうたごえ運動の真価を発揮した。通信活動特筆は愛知・藤村記一郎さん。自身の活動送稿、被爆ピアノを歌うまほろば遊さん、オーストリア情報前田晴子さんの紹介や通信を促す活動。そして読者拡大。通信数と読者拡大では東京・箱崎作次さんも共に大きく貢献。

「核兵器禁止条約が発効された喜びとこれからの使命」(サーロー節子)。その活動を伝える全国各地からの通信はますます重要になっている。

●読者拡大

読者拡大では、前年より多い35都道府県で846人の新読者を迎えた(1月6日現在)。5月に予定した組織活動者・うたごえ新聞読者拡大会議は、10月に延期し開催。会議での会長の基調報告は、コロナ禍におけるうたごえ運動について解き明かし、組織建設の方向性を示した。

組織会議に向け、埼玉での1人で30部を超える先進的な活動。愛知の「広め隊速報」の取り組み、大阪の拡大「0」団体をなくそうの取り組みなどが、全国の読者拡大をけん引した。ブロック会議での交流も力

となっている。

●うた新フォーラムの全国展開

札幌、京都、神奈川(県全体と藤沢合唱団)、千葉で開催。千葉の合唱団プリマベラは、コロナ禍下、演奏がだめなら「聴く」と、団の読者、うたごえ喫茶参加者によびかけ開催。新聞に登場の腹話術・小谷孝子さん、三輪編集長の話、団演奏1曲でプログラム。「読者を広げてみようと思った」と読者から感想。

●季刊「日本のうたごえ」運動作りのテキストとして積極的に活用、運動全員購読をめざす

今年度No.187〜190を発行。2020年代の幕開けに情勢と運動(田中嘉治会長)と合唱発表会演奏批評座談会等No.187。アーサー・ビナード氏の記念講演と総会発言No.188総会特集号。被爆75年特集―祭典を見すえ広島から、と長崎から合唱と語りによる構成「平和の旅へ」誕生から34年の軌跡―。専門家と運動内からの「コロナ禍の中の音楽」特集No.189。「創作センター発足第1年度作品から 座談会」、全国組織会議から田中会長基調報告と発言からNo.190。

季刊のサイクルで活動を掘り下げ、見つめ直す手引きとなるよう編集。田中会長の論文は、情勢の中での運動展開を示唆し、「平和の旅へ」特集は作品誕生の背景、34年の間に生まれた広がりは演奏創造・普及の実際を伝えた。No.190は「風の音符たち」普及と合わせて広く創作曲の交流を深める道筋となる特集。

読者数は横ばいだが、各号で特別注文が出、それが定期購読につながっている。編集会議を充実させ、読者増をひきつづき追求することが課題。

●創刊65周年記念事業をプランニングする

コロナ禍の中、今年度は実施できなかった。5月に予定の記念イベント含め、次年度実施へ。

④学習・教育活動

学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーを計画的に育てる

全国的なコロナ禍の中、例年行ってきた東西の全国合唱講習会、全国指揮・合唱指導講習会、また各地域・ブロック講習会、練習会等、集い歌い学ぶ活動は開催できなかつた。各地の合唱団活動も休止を余儀なくされ、演奏会の中止、集会・イベントの中止による出演取りやめ、日常的なうたう活動も休止が続いた。合唱練習は徐々に再開されているが、地域によっては感染状況によって再び休止するなど、創造活動は困難な状況が続いている。こうした中、感染リスクの高い合唱だからこそ、どうしたら合唱ができるか考えよう、と各種の感染対策ガイドラインなどを参考に、様々な工夫、模索をして合唱活動が続けられた。

●各地の教育活動

愛知では、うたごえ協議会主催による〈まなぼ企画〉が継続的に取り組まれている。創作連続講座を藤村記一郎氏を講師に全5回。発声&合唱講習会は声楽家荻野砂和子氏を講師に第1回が、第2回は合唱指揮者山本高栄氏を講師に行われた。指揮講習会も山本忠生氏を講師に初心者からベテランがチャレンジ。本年1月には小村公次氏を講師に講演会「戦時下の音楽と戦後の音楽」を開催する予定で、Zoomでの参加も受け幅広く呼び掛けられたが、コロナ感染急拡大のため4月に延期となった。また、コロナ禍の団内教育として名古屋青年合唱団では日本のうたごえ祭典合唱発表会本選の録音を聴き、団の課題を話し合ったり、〃浜島康弘が選ぶうたごえ名曲シリーズ〃のCDを聴きながら本人の話や聞きなども「良い学び」としている。

京都の協議会では「つくり学ぶ部会」での取り組み。「まなび」としては、宮沢孝幸京大准教授を招き、コロナ学習会を開催、「コロナウイルス

とは何か」を学んだ。10月より指揮勉強会を実施、2つの教室に分かれて、指揮者の役割と指揮法の基本などを学び合った。「つくる」としては、コロナ禍において創作を！と提起。「歌いたい歌がある」の替え歌を野外で行った府民音楽会で発表し合った。また、京都ひまわり合唱団では、福井センター合唱団の取り組みに倣ってリレーで歌づくりを進めた。

北海道では活動がなかなかできない中、「北海道のうたごえ70年を学ぼう」と、うた新フォーラムを開き、歴史を学んだ。

その他、全国各地の合唱団では、団員を少人数に分けた練習、パートごとの練習、広い会場を借りての練習、昼間練習の取り入れ、リモートによる個人レッスン形式の練習など様々な工夫をしながら「歌うこと」を続けた。東京・中央合唱団では、感染拡大による相次ぐ練習休止の中、欠席メンバーへの「練習動画」や「練習日誌」の配信をして、どんな状況の中でも活動の共有とつながりの実感を配慮。昼間練習を実施して、太田真季さんの「声楽講座」や三輪編集長による「学習会」なども組み入れて、「この機会にこそ次の活動への力を蓄えよう」と練習内容を練った。曲の詩の朗読、声として表現、なども取り入れた。

一方、日本のうたごえ祭典開催地広島では、歌い続けていることが祭典に繋がる、と感染対策を徹底しながら広島合唱団は週2回の練習をほぼ全員参加で実施、その他のサークル・合唱団もほぼ平常通りの練習を再開。コロナ理由の欠席者も若干いる中でコンサートなどの計画も持ち、うたごえ喫茶等も行っている。コロナ禍の現状だからこそ、〃あの時、歌い続けて良かった〃と実践を積み重ね、〃がんばろうフェスタ〃などを成功させている。

●次代を担うリーダーの育成と創造的連帯

専門家を指揮者として迎えていることと運動の担い手として団内から指揮者が育つこととの課題。専門家から学ぶことは多いが、うたごえ運動を進めていく上では運動を理解して合唱づくりをする団内指揮者の存在は欠かせない。そういう担い手をどう作り出していくか等もあらためて問われている。

また、リモートによる合同演奏、演奏交流など、新しい音楽会の在り方、その可能性の模索が続いている。リアルな合唱が本来のあるべき姿、リモート参加にはタイムラグがあるため合唱にはならない等、演奏目的を実現するためのあらゆる可能性を積極的に、そして率直に論議することが求められている。

日本のうたごえ合唱団2020は1月の練習会で発足したまま活動休止となり、2021年度にあらためて結成、活動再開の予定である。

⑤ 青年のうたごえ

● サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ

医療や福祉の關係に勤める者も多く、働き盛りの世代にとっては活動に参加することが難しい現状であったが、オンラインや外での練習などに各地で工夫を凝らして活動を進めてきた。

宮城の「若星Z☆(わげすたーづ)」は、合唱練習以外にも交流の場として芋煮会などを実施して活動を継続。大阪では、大阪のうたごえ祭典2020「国際交流のステージ」に、関西合唱団が青年とともに取り組み、幅広い年齢層の多国籍の方々40名と一緒に歌うことができた。愛媛合唱団青年部「Green Love Cantabile」は、愛媛のうたごえ祭典にて中心メンバーとして盛り上げた。東海青年のうたごえはオンラインでの例会において、楽典の勉強や団員が講師となった学習会を実施して活動を継続。長野のザ・イスカンドルは、活動自粛期間もあったが、感染対策をして練習再開をし、長野市が開催するWEBフェスにも参加。

● 仲間、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める

3・1ピキニデー青年企画、Ring! Rink! Zeroでは

青年のうたごえとして実行委員会に参加。「約束のうた」の編集動画にオンラインで全国各地の青年が参加し、他団体からも好評を得た。

● 2020年全国青年のうたごえ祭典in愛知を青年のうたごえを活性化する場として位置づけ、青年を積極的に送り出し、ひろしま祭典につなげる

新型コロナウイルスの影響により、2020年全国青年のうたごえ祭典in愛知は開催できなかった。地元東海青年のうたごえは、2021年全国青年のうたごえ交流会in愛知に向けて、新たに実行委員会を立ち上げ、労組青年部、劇団、青年団体に足を運びつながりを深めている。日本のうたごえ祭典も延期となったが、全国各地の青年が「♪みんな元気か がんばろうフェスタ」にオンラインで参加し、2021年に繋がるものとなった。

⑥ サークル・合唱団・協議会づくり、ブロック連帯活動

● サークル・合唱団を新たにつくり、合唱団員をふやす活動

協議会も結成し、日本のうたごえ祭典開催を検討している佐賀では、県内の空白を埋めようと意識的な取り組みで、うたごえ喫茶から鹿島うたごえ合唱団を発足させた。

練習を再開、継続した合唱団では、歌いたい願いの受け入れ先として団員を増やしたところもある。

現役が少なくなっている職場に、いかにうたごえを届けるかの検討が課題となっている。

● 合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊読者を増やすことを、サークル・合唱団で討議し、目標を持ち、計画的に増やす活動

加盟は6団体。京都では、電通赤目の森合唱団が電通大阪組もあわせ

ての加盟、退教互たんごシワクチャーズは継続した働きかけの中で、和太鼓サークルのどんひゃらは郷土担当者がコロナ禍のもと、組織活動でも元気づけようと加盟を呼びかけた。宮崎では宮崎うたごえ合奏隊(団)「結の会」が新団体として加盟。祭典開催地の広島では音戸ファミリィコースが、祭典を検討している佐賀では鹿島うたごえ合唱団が加盟。

● 加盟団体500、協議会のない県での確立をめざす活動

6団体の加盟があったが、残念ながら退会も6団体と、全体としては加盟数は横ばいとなった。会員数もほぼ横ばい。佐賀、広島など祭典開催を視野に入れた県での加盟が進んだ。

ひろしま祭典開催を見通した島根の3サークル交流会では協議会についても話し合わせ、新しい芽も生まれた。

例年ブロック交流会を行っている関東・東京、東海、東北などもコロナ禍で残念ながら中止となった。関西と関東では引き続きブロック会議が定期的に持たれ、交流連帯が続いている。

⑦ 事業・普及活動

● 普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする

2020年度の事業普及はコロナ禍の下で例年にならない困難を伴った。特に2020メーデー歌集やNPT反核平和歌集は、それぞれの取り組みが中止となったために目標の半分以上の普及となった。

学習文献としての「うたごえは生きる力」(高橋正志著)は、活用が呼びかけられたが、一部の取り組みにとどまった。

そんな中でも「ニューアレンジ合唱曲集・みんなのうた」に引き続き記念出版、うたごえ作曲家による「オムニバス創作曲集・風の音符たち」は、全国の合唱団で掲載曲の練習、演奏が取り組まれた。みんなうたう会やうたごえ喫茶では、既刊の「うたごえ喫茶828」が活用され、プ

ロジクターによるデータ版の活用も進み、配信による「新しい形のうたう会」での活用も始まった。

文化イベントやコンサートが自粛や中止となる状況の下でも、普天間かおりCD「暁々美ら美ら」、松野迅CD「音楽の花束/チゴイネルワイゼン・鳥の歌」は、うたごえやファンクラブのネットワークの中で普及された。また、各合唱団が取り組んだ演奏会のCDや楽譜の制作も各地で取り組まれているが、各地の経験を全国に広めるための工夫が必要になっている。引き続き、著作権順守の徹底が求められている。

● 全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当をおき、事業普及活動を活発に進める

事業部担当を置いている合唱団は一部にとどまっている。「この出版物をこの人たちに普及したい」という動機づけが重要であり、各合唱団の実情に合わせて個別の対策を行っていくことが必要である。2020年はZoomを使つての事業普及部会を3回開催した。そこで出された「ひろしま祭典グッズ」も含めた事業普及の経験が参加者に広まり力となった。

● 楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめ、新たな層へのうたごえ普及の力にする

音楽センターのサイトからうたごえの楽譜をダウンロードできる仕組みが作られている。音源もダウンロード購入ができるようになっていた。またこの間、様々なインターネットサイトにも直接出品していて、そこでの売り上げも伸びている。インターネットへのうたごえコンテンツの紹介はさらに推し進めていく必要がある。

⑧ 郷土のうたと踊り

●東西郷土講習会を成功させる

ひろしま祭典の全国郷土合同に繋がる講習会として、西日本が5月に、東日本が6月に今福優氏を講師に「生命の詩」を予定していたが、コロナ禍の状況下、中止・延期となった。2021年5月8日、9日に西日本で、7月3日、4日に東日本で開催予定。

●全国の郷土活動、経験交流を活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる

緊急事態宣言により練習会場閉鎖等で練習ができない状況が続いたが、6月頃から活動再開、コロナ禍の中、創意工夫を凝らした活動が展開された。

神戸市役所センター合唱団から生まれた太鼓衆団輪田鼓は「太鼓の響きは元気の源」、そんな想いから「輪田鼓ネットミニシアター兵庫の伝説」を発信、11月の定期演奏会では田中嘉治作調「蘇る蒼き狼」を発表。

民謡集団「鯨」は、「姫山太鼓」等をYouTubeで発信した。調布狛江合唱団は地域の和楽器による「日本の音色」に出演、全国郷土合同の「生命の詩」等を演奏。12月には同団郷土部「跳鼓舞」が特別支援学校でクラス3回に分け、「太鼓ばやし」「すずめ踊り」他を演奏し、子どもたちを元気づけた。跳鼓舞の活動はうたごえ新聞にも投稿掲載。太鼓集団「荒武者」は、障がい者の仲間と一緒にステージを持った。

これらの活動に学び、郷土活動をさらに活発にするためには、年1回開催の全国郷土部会のあり方や各サークル・合唱団の郷土ネットワークづくり等が課題としてあげられる。

●専門家・保存会との協力関係をすすめる

東西郷土講習会・日本のうたごえ祭典準備活動等の中で、専門家・保存会との協力関係が進んだ。民謡集団鯨は和太鼓奏者陽介と合同ライブを開催し、新曲「AKATUKI」を発表、有料動画会員募集を始めた。太鼓衆団輪田鼓は酒蔵公演で創作太鼓ドラマ「岩やんの馬鹿」を桂春蝶と

上演、和太鼓・篠笛・民舞などの各種教室を開講するなど活動を広げている。

⑨専門家及び他団体との協働連帯活動

●専門家及び他団体との情報交流、協力共同で音楽文化の豊かな発展をめざす

75周年記念委嘱作品への協力要請は現在5人の方から承諾を得た。祭典プレ企画で広島ならではの専門家との協力があつた。音楽以外の専門家の協力も得てコロナ対応についての力にした。

原水爆禁止日本協議会や、世界大会実行委員会、平和大会実行委員会、ヒバクシャ国際署名推進連絡会などの会議にも積極的に参加し、NPT・ニューヨーク行動、世界大会、ヒバクシャ国際署名などの運動について交流しながら進めた。

⑩国際交流

●アジア、世界への視点で75周年に向かう世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる

大阪のうたごえ祭典では、在日の人たちと国際交流ステージをつくった。

埼玉のうたごえは、さいたま市が埼玉朝鮮学校幼稚部に当初マスク配布をしない事態に、韓国・平和の木合唱団から寄せられたものと合わせて同校にカンパを届けた。

全国協としての国際交流の方向をさぐるために、アジアの音楽に焦点をあてて、AALA（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）との懇談など、さらに豊かに進めるための検討が必要である。

うたごえ創立70周年から75周年に向かう

2021年活動方針

2023年運動75周年「うたごえ2023ビジョン」に向かう計画づくりと、「6つの止」実現を果たすたかいに連帯し、うたごえの魅力が問われる時代を共に歩もう

私たちをとりまく情勢

〈コロナ禍から見えてきたもの〉

2020年の総会方針では、人類存亡にかかわる2つの脅威―増大する核戦争の危険と気候変動の崩壊―に触れたが、それから1年、全世界で瞬く間に拡大した「新型コロナウイルス」があらたな脅威となって人類に襲いかかっている。世界の感染者は9千万人を超え、死者も200万人に迫っている（1月12日現在）。感染力が増したとされる変異種が多く、多くの国で見つかり、日本国内でも確認されたことで一層不安な日々が続いている。わずかな光明は、欧米などでワクチン接種が始まったことだが、ワクチンは他の予防法を補完するものであり、ワクチンが完成したからといって、直ちにマスクをごみ箱に捨ててはならないと、多くの科学者が警告している。

日本では、PCRの行政検査、民間検査もすぐに受けられないなど「検査難民」が生まれているところもある。日本は欧米諸国に比べて感染者数が桁違いに少ないにもかかわらず（韓国、台湾、ベトナムに比べると桁外れに多い）、医療崩壊の危機に直面している。コロナ禍が起きたが故に看護師などのマンパワー不足、保健所の削減、病院の統廃合等による行政改革のツケが医療現場の負担過多となつてあぶり出されている。

菅義偉首相は感染拡大に触れ、昨年末「ウイルスに年末年始はない」と警戒を強めたが、年末年始休みも返上、不眠不休で治療にあたつている医療現場や年越しもままならぬ一刻を争う生活困窮者が続出している

状況下で、コロナ対策の審議を尽くすべき国会が年明け18日の通常国会まで開かない姿勢は「見殺し行為」にも等しく、一国のトップリーダーとして血のかよったメッセージもない。

昨年は、コロナ禍で来日が途絶えていた海外の一流音楽家たちが、ベートーヴェン生誕250年の最後を飾るように、2週間の隔離措置を覚悟で暮れに来日し、出演したことが注目されている。読売日本交響楽団の常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレは、「2週間は決して短くないが、自分のオーケストラと音楽ができないことほどつらいことはない」と来日理由を語る。年末に「第九」を7公演で指揮したが、困難を乗り越えて日本のオーケストラとの関係を発展させようとする姿勢は、「音楽は人に希望を与え、慰め、勇気づける」「第九」の精神と重なる。

うたごえは、国民の命と暮らしに直結する国難的危機を重要視し、「5つの止」（戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、菅9条改憲政権に止め）を方針化する中で、音楽を通じてその実現のため全国津々浦々で活動を展開してきた。

〈軍事費よりも医療、環境対策を〉

政府の2021年度予算案は一般会計総額が106兆6千億円と9年連続で過去最大を更新した。膨張を続けている財政支出の中でも突出しているのが、7年連続で過去最大を更新している防衛省予算（軍事費）で5・5兆円を計上、「米国と共に海外で戦争する国」を推進する立場を鮮明にした。本年3月に期限が切れる在日米軍駐留経費の日本側負担（思いやり予算）も同予算案に20年度とほぼ同額の約2千億円をつけているが、交渉次第では増額の可能性も出てきている。

日本をはじめ世界の軍事大国が、競うように軍事費を膨らませていることに対して、フランシスコ・ローマ教皇は、「武器、核兵器に費やされる膨大な資金は医療と地球温暖化対策に回すべきであり、私たちはみな、同じ船に乗っている。全ての人が医療やワクチン接種をうけられるように」と各国の指導者に呼びかけている。

〈21年沖縄本土返還50年を前に〉

政府が辺野古沿岸部に土砂の投入を始めて2年が過ぎた。この間の国政選挙や県民投票で、辺野古埋め立て反対の民意が繰り返して示されてきたが、政府は工事を続行。一方、沖縄観光は、コロナの影響で1千万人から2000万人割れの空前の落ち込みが予想されている。

非正規を中心にコロナによる解雇や雇止めも増加しているが、有効求人倍率が全国最下位の沖縄では再就職もままならないという。

沖縄は21年、施政権返還（日本復帰）50年を1年後に控える。また来年は、県知事選と名護・那覇市などの17市町村での首長選、30市町村で議員選挙という「選挙イヤー」の幕が上がる。本年はまさに、これから先の針路を決定する重要な年といえる。

玉城デニー知事は年頭あいさつで、県政運営の柱に「誰一人取り残さない社会」を据えた。普天間飛行場の早期閉鎖返還及び辺野古新基地建設の断念を政府に強く求めていくと共に、米軍基地の整理縮小、日米地位協定の抜本的な見直しに全力で取り組むと語った。多くの県民、国民の願いである。

〈東日本大震災10年、3・11を忘れない〉

東日本大震災は今年3月で発生10年を迎える。福島第一原発事故の後、人口1400人ほどだった山あいの集落、浪江町津島地区（旧津島村）は放射線量が高く、いまだ人が住めない帰還困難区域に指定されている。中に入るには事前登録が必要で、津島に住んでいる方と共に自宅に帰るといふことで同行した福島・なごみーずの大谷敏彰さんは、「10年経っても変わらぬどころか、家族が暮らしていた家は天井が落ち、床は歩くと抜けるという現状…この地区は満州から引き上げてきた方々が何十年もかけて開拓していった地区。原野を切り開いて畑や田を作り、生業をたててきた歴史が原発事故で一瞬にして水泡と化した」と語る。

昨年暮れ、東電は、福島第一原発の汚染処理水について、「海洋放出と大気放出が現実的な選択肢」と表明。漁業関係者からは海洋放出への反対意見も多く、40年以上はかかると言われる福島原発の廃炉、汚染水

対策はじめ課題は山積み。政府は2050年に温室効果ガス排出をゼロにする「グリーン成長戦略」を発表したが、これはあくまでも原発ありきで、脱炭素技術である原発の再稼働や次世代燃料の開発等により、引き続き最大限活用していく姿勢に他ならない。

〈核兵器禁止条約への批准を求めて〉

本年1月22日に発効される「核兵器禁止条約」。うたごえ新聞新年号に登場したサーロー節子さんは、「広島・長崎で亡くなった何十万の霊に、『やっとここまでこぎつけました』と心の中で報告…あなたたちの死がムダにされないよう、私たちは一生かけて働きます」、核保有国は核兵器製造に必要なウラニウム発掘に先住民を使い、カナダではその人たちが癌で亡くなり、一つの村が全滅したところもあります」と、喜びと同時に核の恐ろしさを語っている。

条約が発効すれば1年以内に、締約国会議が開催され、その後も2年おきに開催される。日本の世論も「禁止条約に参加すべき」が7割以上になっており、拒否し続ける日本政府に「署名・批准を求める」署名の取組みと、今秋予定されている条約締約国会議への参加を強く求めるとともに、「禁止条約」に参加する政権に変えることこそ急務の課題となっている。

〈9条改憲を許さず、「政治とカネ」疑惑噴出の菅政権に終止符を〉

菅首相は、安倍前政権を継承、憲法改正にも挑戦すると明言した。自民党が執念を燃やした憲法審査会への改憲案の持ち込みと、国民投票法改定案の策動は、国民世論と野党との共闘の力により8国会連続で阻止されている。

「保守を自称する国会議員は、命がけて9条改正を」と吉村洋文大阪府知事もツイッターで改憲をあおったが、国民からは「コロナ対策」や「経済対策」が優先との批判が続出、「改憲」を挙げる声は少数になっている。今年こそ9条改憲政権に止めを打つチャンス到来と言える。

日本学術会議会員任命拒否は、歴史の反省を無視した暴挙である。政

府は、理由も明かさず任命を拒否する一方で、この問題を学術会議のあり方の問題にすり替えようとするばかりか、同会議をときの政府の「政策」を推進するためのプロジェクトへと変質させ、独立性を奪おうとしている。これに対して学会から映画人、自然保護団体、宗教団体まで幅広い千数百もの団体が抗議声明を上げ（うたごえも『会長談話』で抗議）、かつてない動きが出てきている。独裁意識の強い菅首相が「禁断の領域に手を出した」愚かさを徹底的に追及する好機であり、政府に対し断固、任命しない理由の開示と任命拒否の撤回まで抗議の声をあげていくことが強く求められている。

菅内閣の支持率が急落。その主な要因は、コロナ感染への無為無策に加え、「桜」前夜祭をめぐる国会での前首相の虚偽答弁への怒りと、解明に背を向ける菅首相の姿勢にある。他にも「政治とカネ」疑惑が堰を切ったように噴き出しているにもかかわらず疑惑隠しを続ける菅政権。この間の任命拒否問題で露わになった「介入政治」、異議を唱える官僚には報復人事も辞さない「恐怖政治」、そして全てを支配するために、権力で脅しをかけ、国民に声を届けない官邸主導の「強権政治」。この異常なまでの3K政治の菅政権に日本の未来は託せない。

（コロナ禍の中、いのちと音楽にどう向き合うか）

昨年11月、内閣官房のHPで公開された「イベント開催制限のあり方」では複数の人間が（大声で）発声するリスクとして、ミュージカル、オペラ、演劇、歌舞伎等様々な文化芸術ジャンルがある中で「合唱」だけが例示されている。全国の合唱団が、困難な中をでき得る限りの感染防止策をとって練習や公演再開にこぎつけている中、自粛規制で合唱活動を禁止するのではなく、活動を継続させるためにも、国がけん引して広く医療・検査体制を強化し、自粛要請に対する補償等の拡充に踏み出すことが求められている（全日本合唱連盟では、この件に関して政府機関に「要望書」を提出している）。

政府が真っ先に公演・イベントを中止したことは、芸術文化活動が「不要不急」のレッテルを貼られたにも等しく、自粛要請が人々の精神に大き

な負担を強いている中でこそ芸術文化は「必要火急」なのであり、人々に温かな心と、勇気を与えられるのが芸術そして音楽である。

前首相は在任中、「困難にあっても、文化の灯を絶やさない」と述べた。菅政権が前政権の継承を語るのであれば、それこそ、文化の灯を絶やさないために力を尽くしている人々の窮状にもっと目を向けるのが先決である。

今後、コロナ禍下のサークル・合唱活動をどう進めていくか。本年は、その保障となる「コロナ感染防止」を「5つの止」に加えた「6つの止」を市民運動とも連帯しながら成し遂げることが極めて重要になっている。

コロナ禍直撃の2020年からコロナ禍を乗り越え、うたごえの未来を描く2021年活動方針

方針（1）「9条改憲発議」を阻止する最大の山場の年に、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、菅暴走政権に止（とど）めの「6つの止」のたたかいで一致する市民共闘をさらに広げ、連帯しながら憲法のこころを広めよう

①「日本学術会議会員の任命拒否の撤回を求める署名」を全国で広める。歌や音楽で持てる力を發揮して任命拒否撤回の世論を起こしていく。

・「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」を全国で広め強めていく。＃6・9行動＃はじめ全国各地での街頭駅頭宣伝等を行ううたや音楽で核兵器廃絶をアピールする。

・サークル・合唱団、協議会で「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」への入会、賛同金の訴え等の取り組みをすすめる。同会として、専門家とともにこれまで4回の取組みを展開してきたが、事務局体制の強化を図りながら今後の活動のあり方について検討していく。

②沖縄県民のたたかいに連帯して、辺野古新基地建設を断念させるた

め座り込み行動など、「沖繩を返せ！うたごえ大行動本部」の取組みを強化し、全国でも沖繩支援・連帯の取組みを強めるとともに「沖繩を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・ 創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

③ 8月に延期になったNPT再検討会議の成功とともに、今秋開かれる核兵器禁止条約締約国会議に向け、日本原水協とも調整しながら派遣運動を検討する。

・ 学習教材としても活用できるよう昨年製作した、NPT反核・平和歌集を活用し、うたごえ会、コンサート等機会あるごとに広範な人々に広げ、4千部を早期達成する。

④ 福島県では数多くの県民がまだ住めない、故郷に帰れない地域がある中で、原発汚染処理水の海洋放出案も大きな問題になっている。全ての原発の再稼働を許さず原発ゼロの社会をめざす歌をつくり復興支援の輪を広げる。

⑤ 本年10年を迎える東日本大震災被災地への支援を継続し、復興・再生をめざす思いを歌にして広げる。

⑥ コロナウイルス発生は天災だとしても、感染拡大に歯止めがきかなくなつたことは、政府の無策ぶりによる人災であり、国の対策の問題点を追及しながら、感染防止対策を講じて合唱練習や公演が実施できるよう、サークル・合唱活動を進めよう。

・ 文化行政に対してコロナ感染症対策にかかる芸術文化活動への経済支援や施設使用料減免等の取組みを進めよう。

方針へ2）人々の願いと結び、「みんなうたごえ会」を旺盛に展開し、平和憲法を守り生かす「共に生きる町づくり・地域づくり・職場づくり」のうたごえを活発に広げる。

① 「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びの機会と場をひろげる。

・ 日常の演奏・創造活動を発展させ、平和で健康なうたを普及する。
・ 全市区町村で多彩なうたごえ活動を展開し、創りたい広げる普及活動を旺盛に展開する。

② すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、2023年運動75周年にむけた全市区町村での「みんなうたごえ会」を計画もって実践する。

③ すべてのサークル・合唱団は職場にうたごえを届け、サークルづくりの計画をもって実践する。

④ 全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたごえ会等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

⑤ 多くの人が「こぞうたごえを創る」愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

・ 一昨年、創作作品を蒐集・管理・公開する機関として設立した「創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・ 「みんなのでづくり歌う運動」を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・ 全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全国各地でも講習会を開催する。

方針へ3）合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

① 合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。

② 新しいところに積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らして豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③ 合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④ 合唱発表会のあり方について小委員会をはじめとした検討をもつ。

方針（４）地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

① うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

② 「2021日本のうたごえ祭典 in ひろしま」を地元、全国の連帯で成功させ、23～25年の日本のうたごえ祭典開催地を早期に決定する。

③ 祭典プロジェクトで26年以降の開催計画を具体化する。

方針（５）運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ発ジャナル」としてのうたごえ新聞をいつそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

① 「読み、作り、広げる」を合言葉に、紙面の中からたくさん運動財産を学び、創造、組織、普及の力にし、13000人の2023年目標の各県での夢実現への戦略、方針を具体化する。本年度目標達成のため新読者を2000人増やし、次期総会時には20年総会基数を回復する。

② 規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの全国展開を計画する。

③ 通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④ 季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を500人増やす。

⑤ 5月23日に開催する創刊65周年記念シンポジウム（仮称）を専門家の協力も得て成功させる。

方針（６）演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめる、次

代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

① 運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習をすすめる前進の力にしていく。

② うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見ますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

③ 1996年以降改訂されていない「教育テキスト」の発行を検討する。

④ 各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協議会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

⑤ サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画を持つ。

⑥ 日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針（７）青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年を迎える。

① サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

② 仲間づくり、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③ 2021全国青年のうたごえ交流会 in 愛知を青年のうたごえを活性化する場として位置づけ、青年を積極的に送り出し、2021日本のうたごえ祭典 in ひろしまにつなげる。

方針（８）サークル・合唱団をつくり協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サーク

ル加盟を積極的にすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

- ① サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。
- ② 合唱発表会参加団体や協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やしていく。

加盟団体500団体をめざす。

- ③ うたごえ協議会のない県の協議会確立を計画を持ってすすめる。現在2サークルある地域は今年度中の協議会結成をめざす。

- ④ 職場のうたごえの建設強化をはかる。

- ⑤ 2021年の全国組織活動・うたごえ新聞読者拡大会議を5月22日(土)、23日(日)に開催する。

- ⑥ 全国1741自治体(東京23区含)で活動するうたごえ加盟・未加盟のサークル・合唱団の実態調査を行い、加盟拡大を図る。

方針(9) うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

- ① 普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

- ・ 被爆75年記念作品「うたごえ作曲家によるオムニバス創作曲集「風の音符たち」を講習会、祭典で位置づけ、歌うこととリンクして普及する。

- ・ 「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見ますか」「メーデー歌集」「NPT反核・平和歌集」など楽譜、文献、CDなどを活用し、多くの人にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

- ・ みんなうたう会、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、出版物の活用や普及に努める。

- ・ サークル・合唱団の演奏活動と結んだCD、楽譜などを出版し普及する。

- ② 全ての協議会加盟団体が事業活動が取り組めるよう事業部担当をお

き、経験を交流し合い事業普及活動を活発に進める。

- ③ 楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめ、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

方針(10) // 郷土のうたと踊り”を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にし、まちづくりにつながる活動を計画をもって進める。

- ① 東西郷土講習会を成功させる。

- ② 全国の郷土活動、経験交流などを活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

- ③ 専門家・保存会との協力関係を進める。

- ④ 「全国郷土センター(仮称)」ネットワークづくりを検討する。

方針(11) 専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう。

- ① 各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会など運動内外の専門家との協力共同をはかり、うたごえの創造的力をたかめる。

- ② 平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針(12) 世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げるとりわけ、アジア、世界への視点で75周年に向かう国際交流の輪をひろげる。

方針(13) 「うたごえ2023ビジョン」をさらに補強する計画づくりと75周年記念事業委員会を設置し、記念事業計画を検討・遂行する。

おわりに

コロナ禍の中でも、果敢に音楽と向き合い、閉塞感だけでない楽しみ方も必要と語る合唱指揮者の栗山文昭さんがうたごえ新聞で紹介している岡田暁生著「音楽の危機―《第九》が歌えなくなった日」（中公新書）。本の中で著者は「これからは総オンライン化の時代だ、となりがちだが、空気の共有を怖がり始めたら決定的に失われる何かがある」と記している。

ノンフィクション作家の柳田邦男さんは、「音楽というのは、魂の表現であり、魂のコミュニケーション。魂が姿や形、色を見せるのは、人によつては絵だったり、演劇だったりいろいろ。でも音楽こそ、最も強く普遍的に、魂の告白・吹き・叫び・呻き・慟哭を伝えるものだ」と語る。人みんなが持っている「魂」について、氏は、「人間の胸の中に秘められた楽器のようなものであり、ひとりでに鳴るのではなく、外部から訪れたものが鳴らすのだ」と。

音楽というものは、同じ空気を吸って臨場感を味わう中で、魂を揺さぶり、いのちへの源泉となるエネルギーまでも湧き起こす力を持っている。大勢で言葉を伴う「合唱」は、一層克明に受け取る者の心に宿る楽器を高らかに鳴らすに違いない。

コロナ禍で被った犠牲や損害は計り知れないが、コロナ禍が起きたがゆえに、見えなかったものが見えたり、聞けなかったものを聞くことができたり、これまで非日常的だったことが日常化したり、人々の営みに大きな変化をいまでも与えている。

変化を捉えて好機をつかむ。うたごえも、今日の状況を新しい創造を生み出すための不測のチャンスと受け止めることが、望外の喜びに繋がるかもしれない。危機は運動を強くすることを信じて。

◆2021年主な日程予定

◎2021年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典 in ひろしま 12/3(金) ～ 12/5(日)
東日本合唱講習会 6/5(土) ～ 6/6(日)
東日本郷土講習会 7/3(土) ～ 7/4(日)
西日本合唱講習会 5/4(火・祝) ～ 5/5(水・祝)
西日本郷土講習会 5/8(土) ～ 5/9(日)
全国指揮・合唱指導講習会 6/18(金) ～ 6/20(日)

産業別&階層別うたごえ祭典

教育 10/2(土) ～ 10/3(日) 京都
私鉄 8/28(土) 愛知
国鉄 10/16(土) ～ 10/17(日) 神奈川
医療 中止
自治体 9/19(日) ～ 9/20(月・祝) 兵庫
電通 中止
青年 10/9(土) ～ 10/10(日) 愛知

◆2020年度表彰団体・個人一覧

表彰団体

【全国協・年間優秀団体】

☆激励賞

- 広島のうたごえ協議会（広島）

【うたごえ新聞】

☆ブルーペン賞

- 藤村記一郎（愛知のうたごえ協議会）

☆通信賞

- 小山真理子（埼玉のうたごえ協議会）
- 箱崎作次（東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団）
- 齋藤一正（東京・みなと合唱団）
- 鈴木勝雄（東京・調布狛江合唱団）
- 河野好行（神奈川のうたごえ協議会）
- 北林亜弓（大阪のうたごえ協議会）

☆機関紙誌賞

- 「竜頭蛇尾」（福井・福井センター合唱団）
- 「マルチャ」（北海道・北海道合唱団）
- 「くれっせんど」（大阪・関西合唱団）

☆読者拡大賞（団体）

- 愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団（愛知）

- 名古屋青年合唱団（愛知）
- 長崎支局（長崎）
- 埼玉東部合唱団レインボー（埼玉）

☆読者拡大賞（個人）

- 松島正行（大阪・北部センター合唱団）
- 馬場功（滋賀・滋賀のうたごえ）
- 藤村記一郎（愛知・愛知のうたごえ協議会）
- 武藤佳子（愛知・愛知のうたごえ協議会）
- 森川恵美子（長崎・長崎のうたごえ協議会）
- 箱崎作次（東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団）
- 壬生明美（埼玉・埼玉東部合唱団レインボー）
- 境敏彦（埼玉・埼玉東部合唱団レインボー）
- 遠藤譲（埼玉・埼玉合唱団）
- 中西晴一（北海道・北海道合唱団）
- 西本好道（兵庫・東播センター合唱団）
- 埴治子（千葉・合唱団プリマベラ）
- 鈴木勝雄（東京・調布狛江合唱団）
- 小沢僖和子（静岡・静岡合唱団なかま）
- 齋藤きよ子（京都・舞鶴くろしお合唱団）
- 松田さえ子（佐賀・女声合唱団パッソアパッソ）

【音楽センター】

- ☆ゴールドディスク激励賞
- 北海道合唱団
- 埼玉合唱団

◆2020年入退会団体

入会（団体）

- 電通赤目の森合唱団（京都）
- 宮崎うたごえ合奏隊（団）「結の会」（宮崎）
- 音戸ファミリーコーラス（広島）
- 退教互たんごシワクチャーズ（京都）
- 鹿島うたごえ合唱団（佐賀）
- どんひやら（京都）
- うたごえサークルたんぼぼ（滋賀）
- 合唱団「びわこの風」（滋賀）
- 関西合唱団青年部Peace & Amuse（大阪）

退会（団体）

- 蒲郡ぞう親子うたう会みかん（愛知）
- 歌の広場合唱団（千葉）
- ナイスミディ&ゲンキーズ（神奈川）
- 和太鼓ドン（京都）
- （株）太鼓センター（京都）
- 虹のコーラス運営委員会（京都）
- おおさかパルコープサークルレインボーコーラス（大阪）
- 泉コーラス（長野）
- うたごえサークルはと（長野）